

源氏物語

蜻蛉

紫式部

青空文庫

ひと時は目に見しものをかけろふのあ

るかなきかを知らぬはかなき（晶子）

宇治の山荘では浮うきふね舟の姫君の姿のなくなつたことに驚き、いろいろと捜し求めるのに努めたが、何のかいもなかつた。小説の中の姫君が人に盗まれた翌朝のようであつて、このいたましい騒ぎはくわしく書くことができない。

京からの前日の使いが泊まつて帰らなかつたため、母夫人は不安がつてまた次の使いをよこした。まだ鶏の鳴いているころに出立たせたと云つてゐる使いにどうこの始末を書いて帰したもので

あろうと、乳母めのとをはじめとして女房たちは頭を混乱させていた。

何のわけでどうなったかと推理してゆくことができずに、ただ騒いでいる時、浮舟の秘密に関与していた右近うこんと侍従だけには最近の姫君の悲しみよう、煩悶はんもんのしようの並み並みでなかつたことから、川へ身を投げたという想像がつくのであつた。泣く泣く夫人の送つてきた手紙をあけて見ると、

あまりにあなたが心配で安眠のできないせいでしょうか、今夜は夢の中であなたを見ることすらよくできないのです。眠つたかと思うと何かに襲われて苦しむのです。そんなことで気分もよろしくなくて困ります。移転される日の近くなつたことは知っています、それまでの間をこの家へあなたを来させていた

く思います。今日は雨になりそうですからだめでしょうが。

と書かれてあつた。昨夜浮舟の書いた返事もあけて読みながら右近は非常に泣いた。こんな覚悟をしておいになつたので心細いようなことをお言いになつたのである、小さい時から少しの隔てもなく親しみ合つた主従ではないか、隠し事は塵ちりほどもなかつた間柄ではないか、それだのに最後に自分をおうとみになり自殺の氣けぶりもお見せにならなかつたのは恨めしいと思うと、泣いても泣いても足らずあしず足摺りあしずりということをしてもだえているのが子供のようにあつた。悲しんでいたことにはよく氣はついていたのであるが、自殺などという恐ろしいことの決行できる方とは見えず、優しい柔らかい心の持ち主だつたではないかと、まだ事実を事実

として信じることができずにただ悲しいばかりの右近であつた。乳母はかえつてはげしい驚きのために放心して、

「どうすればいいだろう、どうすれば」

とばかり言っているのである。

ひょうぶぎよう

兵部卿の宮も普通でない気配けはいのある返事をお読みになつた

ため、どんなふうな気になつているのであろう、自分を愛していることは確かであるが、移り気であると自分の言われていることに疑いを持つていたから、大將の手へ行くのではなくどこともなく行くえをくらまそうとするのではあるまいか、と不安でならぬお思ひになつて使いをお出しになつた。

使いが来てみると家の中は女の泣き叫ぶ声に満ちていてお手紙

を受け取ろうとする者もない。どうしたことかと下の女中しもに聞くと、

「姫君が昨晚にわかにお亡かくれになりましたので、女房がたはだれも気を失ったようになっていらっしやるのですよ。御用をお取り次ぎしましてもだめでしょう」

と言った。何の事情も知らぬ男であつたから、くわしく聞くこともせずに帰つてまいつた。そして山荘の出来事を取り次ぎによつておしらせしたのであつた。宮は夢とよりお思われにならない。ひどく病をしているというふうでもなく、いつも気分がすぐれぬとは書いてあつたが、昨日きのうの返事にはそれも書かず、平生のものよりも情の見えることを言つて来たではないかと不思議にばかり

お思われになつて、時^{とき}方^{かた}に自身で宇治へ行き確かなことを調べて来るようにお命じになつた。

「あの大将のお耳にどんなことがはいつたのですか、宿直^{とのい}をする者が忠実に役を勤めないというお叱^{しか}りがあつたとかで、私の侍が使いにまいったり、帰つたりいたしますのさえ、見つけますと調べ立てるようなことをする者らがあるそうなのですから、口實なしに私が行きまして、それが大将さんへ知れますとあなた様の御迷惑になることが起こるのではございませんでしょうか。そしてまた人が急病でお死になつた所などというものはおおぜいの人が集まつてもいるでしょうから」

「だからといって、訳のわからぬままにしておけるものではない。

何とか口実を作つて行つて、こちらの味方になつてゐる侍従などに逢つて、真相を確かめて来てくれ。どんなことをかういふふう
に言つてゐるかをね。下人というものはよくまちがつたことを聞
いて来たりするものだから」

こう仰せられる宮の御様子においたましいところの見えるのも
もつたいなくて時方はその夕方から宇治へ出かけた。この人たちが
急いで行けば早く行き着くこともできるのであつた。少し降つ
ていた雨はやんだが泥^{ぬかるみ}濘^{みち}の路につかれていたし、はじめから侍
風に装つていたのであるし、目だつこともなく門をはいることので
きた山莊の中は混雑してゐた。今夜のうちにお葬儀をしてしま
うのであるなどと皆の言つてゐるのを聞いて時方はひどく驚かさ

れた。右近に面会を求めたが逢えない。

「何が何やらわからぬふうになっていまして、起き上がる力もないのです。夜分おそくにでもなりましたらおいでくださいませ。

お目にかかれませんかのは残念でございます」

と取り次ぎをもつて言わせた。

「そうではありましようが、こちらの御事情がわからぬままでは帰りようがありません。もう一人の方にでも逢わせてください」

時方がせつに言ったために侍従が出て来た。

「とんだことになりました、だれも想像のできませんようなふうでお亡なくなりになったものですから、悲しいなどと申す言葉では私どもの心持ちは出てまいりません。夢のように思ひまして、だ

れも皆呆然^{ぼうぜん}としておりますとだけ申し上げてくださいませ。少
しこうしました気持ちの納りますころになれば、その前にどんな
に煩悶をしておいでのになりましたかと申すことや、あの宮様のお
いであそばした晩に心苦しく思^{おぼしめ}召した御様子などもお話し申し
上げるのができるかと思ひます。触穢^{しよくえ}の期間の過ぎました時
分にもう一度またお立ち寄りください」

と言つて侍従ははげしく泣く。奥のほうにも泣き声が幾いろに
も聞こえて、乳母らしく思われる声で、

「お姫様どこへいらつしやいました。帰つておいでくださいませ。
御遺骸^{いがい}さえ見られませんとはなんたる悲しいことでしょう。毎日
毎日拝見しても飽くことのないあなた様でした。そのあなた様の

御幸福におなりになるのを祈りますことで生きがいがあった私ではございませんか、それにあなた様は打ちやってお行きになりまして、どこへ行ったとも知らせてくださらない。鬼神でもあなた様を取り込めてしまうことはできないはずです。人が非常に惜しむ人は、帝たいしやくてん釈天も返してくださるものです。お姫様を取ったのは人にもせよ鬼にもせよ返しに来てください。御遺骸だけでも見せてほしい」

こう叫んでいるうちに不審な点のあるのに氣のついた時方は、「真相を知らせてください。だれかがお隠しになったのですか。確かに知りたく思召して、御自身の代わりにおよこしになった私を使いです。今ははつきりしないままでも事は済むでしょうがあ

とでほんとうのことがお耳にはいった節、御報告が違っていたものでしたら使いの罪になります。まただれだれに逢えと、御好意を持つものと思召して御名ざしになったのに対しても相済まぬこととお思いになりませんか。一人の女性に傾倒される方は外国の歴史などにもありますが、宮様のあの方への御熱愛ほどのものはこの世にもう一つとはないと私は拝見しているのです」

と言った。道理なこと、この場合の宮の御感情はさもこそと恐察される、隠しても姫君の普通の死でない噂うわさは立つことであるうから、今申し上げておくほうがよいと侍従は思い、

「だれかがお隠ししたかという疑いも起こることでしたなら、こんなふうにかじゆうの人が悲しみにおぼれることもないでしょう。

お悲しみになつてめいつたふうになつていらつしやいましたところに、殿様のほうから少しめんどうなふうの仰せがあつたのです。

お母様である方も、あのわめいております乳母なども初めからの方へ迎えられておいでになりますことの用意に夢中でしたし、宮様のお志に感激しておいでになりました姫君の思召しはまた別でしたから、それでお頭（つむり）が混乱してしまつたのでしよう、思いも寄らぬことになりました心身ともに失つておしまいになつたので、

あの乳母のようなむちやな叫びもされるのですよ」

さすがに正面から言おうとはせずにはほのめかしていることのあるのを内記も知つた。

「それではまたお静かになつてから改めて伺いましょう。立ちな

がらの話にしてはあまりに失礼なことになります。そのうち宮様御自身でもおいでになることになりましょう」

「もつたいない、それはいけません。今になりました。いっさいの秘密の暴露してしまいますことは、お亡なくなりになりました方のためにあるいは光栄なことかも知じませんが、十分隠したく思召したことですから、秘密は秘密のままにしてお置きください。ほうが御好志になります」

などと侍従は言い、姫君の最後が普通の死でないことをほかへ洩もらすまいとしても、自然に事実として人が悟つてしまふことであろうと思ひ、こんな会談を長くしていることも避けねばならぬと思う心から時方を促して去らしめた。

雨の降る最中に常陸夫人ひたちが来た。遺骸があつての死は悲しいといつても無常の世にいては、どれほど愛していた人でもある時は甘んじて受けなければならぬのが人生の掟おきてであるが、これは何と思ひあきらめてよいことかと悲しがつた。苦しい恋の結末をそうしてつけたことなどは想像のできぬことで、身を投げたなどとは思ひ寄ることもできず、鬼が食つてしまつたか、狐きつねというようなものが取つて行つたのであろうか、昔の怪奇な小説にはそんなこともあるがと夫人は思うのであつた。また常に恐れている大将の正妻の宮の周囲に性質の悪い乳母というような者がいて、薫かおるが浮舟をここへ隠して置いてあることを知り、だまして人につれ出させるようなことがあつたのではあるまいかと、召使いに疑いをか

けて、

「近ごろ来た女房で気心の知れなかつたのがいましたか」

と問うた。

「そんなのはあまりにこちらが寂しいと申していやがりまして、
辛抱しんぼうもできませんで、京へお移りになればすぐにまいりますと
いうような挨拶あいさつをしまして、仕事などだけを引き受けて持つて
帰ったりしまして、現在ここにいるのはございません」

答えはこうであつた。もとからいた女房も実家へ行つていたり
して人数は少ない時だったのである。侍従などはそれまでの姫君
の煩悶を知つていて、死んでしまいたいと言つて泣き入つていた
ことを思い、書いておいたものを読んで「なきかげに」という歌

も硯すずりの下にあつたのを見つけては、騒がしい響きを立てる宇治川が姫君を呑のんでしまったかと、恐ろしいものとしてそのほうが見られるのであつた。ともかくも死んでおしまいになつた人が、どこへだれに誘ゆうかい拐かいされて行つてゐるかというように疑われているのは気の毒なことであると右近と話し合い、あの秘密の關係も自発的に招いた過失ではないのであるから、親である人に死後に知られても姫君として多く恥じるところもないのであると言ひ、ありのままに話して、五里霧中に迷つてゐるような心境をだけでも救いたいと夫人を思い、また故人も遺骸を始末するのが世の常の営みなのであるから、そのまま空で悲しんでばかりいることをしてゐては日が重なるにしたがい秘密は早く世の中へ知られてしま

うことでもある、その体裁も相談して作るほうがよい、どうしても真実を母夫人に知らす必要があるとして、ひそかに兵部卿の宮との関係、そののち大将に秘密を悟られて姫君が煩悶した話をするのであったが、語る人も魂が消えるようになり、聞く人もさらに予期せぬ悲哀の落ち重なってきたふためきをどうすることもできないふうであった。それではこの荒い川へ身を投げて死んだのかと思うと、母の夫人は自身もそこへはいつてしまいたい気を感じた。流れて行ったほうを捜させて遺骸だけでも丁寧に納めたいと夫人は言いだしたが、もう大海へ押し流されたに違いない、効果は収めることができずに人の噂だけが高くなることははばからなければならぬことを二人は忠告した。どうすればよいかと思う

と胸がせき上がってくる気のする常陸夫人は、どうと定めること
もできずに茫ぼうとしてゐるのを二人がたすけて、車を寄せさせて姫
君の常に坐ざしてゐた敷き物、身近に置いた手道具、もぬけになつ
ていた夜具などを入れ、乳母の子の僧と、その叔父おじにあたる阿
闍梨じゃり、そのまた親しい弟子でし、もとから心安い老僧などで忌中を籠こも
ろうとして来ていた人たちなどだけに眞実のことを知らせ遺骸の
あつてする葬式のように繕つくろわせて出す時、乳母は悲しがつて泣き
転まろんだ。宇治の五位、その舅しゅうとの内舎人うちとねりなどという以前に嚇おどしに
来た人たちが来て、

「お葬式のことには殿様と御相談なすつてから、日どりもきめてり
つぱになさるのがよろしいでしょう」

などと言っていたが、

「どうしても今夜のうちにしたい理由わけがあるのです、目だたぬようにと思う理由もあるのです」

と言ひ、その車を川向かいの山の前の原へやり、人も近くは寄せず、眞実のことを知らせてある僧たちだけを立ち合わせて焼いてしまった。火は長くも燃えていなかつた。田舎いなかの人はこうした作法はかえつて都人より大事にするもので、そしてこの場合の縁起を言つたりすることもうるさいほどにするものであつたから、大家の夫人の葬儀とも思われぬ貧弱な式であつたと譏そしる人があつたり、また側室であつた人の場合はこんなふうにして済まされるのが京の風俗であるなどと言つたり、いずれにもせようれしくな

い取り沙汰ざたを人はした。そうした階級ざいけいの人がどう思ったかということさえもつましいこの場合に、大將が遺骸も残さず死んだと聞いては必ずどこかへ失蹤しつそうをしてしまったことと疑うであろうし、親族関係の濃い宮様のほうへその話の伝わってゆかぬはずもない、その時に宮がお隠しになつたと大將は思うまい、どんな人が隠しているかと思ひ想像もされるに違ひない、生きていた間は高い貴人たちに愛される運命を持った人が、死後に醜い疑いをかけられるのはもつてのほかであると女房らは思ひ、山莊の中の下人たちにも今朝けさ姫君の姿の見えなかつた騒ぎさわぎに、思わずも実相を悟らせることになつた者らへは口堅めを嚴重にし、知らなかつたのにはあくまでも普通の死であつたように取り繕うことに侍従と

右近は骨を折った。時間がたったのちには浮舟の姫君が死を決意するまでの経過を宮へも大将へもお話しすることができようが、今は興ざめさせるような死に方を人の口から次へ次へと聞こえることは故人のために気の毒であると思ひ、この二人が自身らの責任を感じる心から深く隠すことに努めた。

この時に薫は母宮が御病氣におなりになつて石山寺へ参籠さんろうをあそばされるのに従つて行つていて騒がしく暮らしていたのであつた。京よりもまだ遠くにいて宇治のことが気がかりでならぬ薫でもあつたが、はかばかしく消息をする人もなかつたために、葬儀にも大将家の使いの立ち合なかつたのは山荘の人々の情けなく思うところであつたが、莊園の人が石山へ行つてはじめて姫君

の死は薫へ報じられたのであった。使いはその翌日の早朝に宇治へ来た。

非常なことの起こつたしらせを受け、すぐにも自分で行くべきですが、母宮の御病気のために日数をきめて籠こもっているために、それも実行ができません、昨夜にもう葬送を行なつたということですが、なぜそれは私へ相談をしませんでしたか、そして日を延べることが普通ではありませんか。しかも簡単に儀式をしてしまったと聞いて残念に思います。どうしてもこうしても同じことですが、一人の人間の最後の式ですから、田舎いなかの人たちの譏そしりを受けたりすることになつては、自分のためにも迷惑です。

と、あの親しく思っている大蔵大輔たゆうを使いにして言わせたのであった。使いの来たことでまた悲しみが新しくなつたし、答える言葉も何と言つてよいかわからぬ時であつてみれば、人々は泣くのをあいさつ挨拶に代えて何とも申し出すことはできなかつた。

薫は思いがけぬ愛人の死に落胆をして、情けない場所である、幽鬼などが住んでいてそうした災さいやく厄をしばしば起こすのでなからうか、それと気もつかずにどうして長く宇治などへ置いていたのだろう、不快な関係がほかに結ばれたらしいことなども、ああした不用心な所へ住ませておいたために隙すきをうかがわせることになつたに違いない、と思われるのも皆自分の非常識に原因したことであると胸が痛くなるほどにも悔まれた。御病気で専念に仏へ

祈つておいでになる母宮のおそばでこんな煩悶はんもんをしているのはよろしくないと思ひ薫は京の邸やしきへ歸つた。夫人の宮のところへは行かずに、

「たいしたことではないのですが、身边に不幸が起こつたものですから、しばらく落ち着きますまで、縁起の悪いことにもなりませんから謹慎していようと思ひます」

などと御挨拶をしておいて、一人で人生の深い悲しみを味わつていた。浮舟うきふねの容姿の愛あい嬌きょうがあつて、美しかったことなどを思い出すと、非常に恋しくなり、悲しくなる薫は、その人の生きていた時には、それをそうと認めようとはせず、たびたび逢いに行こうともせず、寂しい思ひばかりをさせて来たのであろう

と思う後悔があとからあとからわいてくる。恋愛について物思いの絶えない宿命をになつて、自分である、信仰生活を志しているながら俗から離れずにいるのを仏が憎んでおいでになるのである。どうか、悟らせようとしての方便には未来の慈悲を隠してこんな残酷な目も仏はお見せになるものであると、思い続けて仏勤めをばかりしていた。

浮舟をお失いになつた兵部卿の宮は、まして二、三日は失心したようになつておいでになつたため、どうした物もの怪けが憑ついたかと周囲の人たちが騒いでいるうちに、ようやく涙が流れ尽くしてお心が静まつてきたと同時に、生きていた日の浮舟が恋しくばかりお思い出されになるのであつた。他人には重く病氣をしている

ふうを見せて、亡^なき恋人を思う悲歎に沈んでいることは知らせないでいるのであると、御自身では思召したが、自然御様子にそれが現われるものであるから、どんなことにお出逢いになって、こんなにも命もあぶないまでに悲しんでおいでになるのであろうという人もあるために、大将もそれを知り、故人とは自分の想像したような関係を作っておいでのになったらしい、手紙をおやりになりたりするだけのことではないのであった、宮が御覧になれば必ず深い愛着をお覚えになるはずの人であった、生きていたならば自分は裏切られた男としての醜名を取らなければならぬのであったと、こう思うようになってからは少し故人へのあこがれがさめた気のする薫であった。

兵部卿の宮の御病氣見舞いに伺候せぬ人もなく、世間の騒ぎにもなつてゐる場合であるのに、たいした喪というわけでもないのに、自分がお見舞いにならないのも僻見をいだいてゐるように見られることであらうからと思ひ、薫は二条の院へ伺つた。この時分に式部卿しきぶきようの宮と言われておいでになつた親王もお薨かくれになつたので、薫は父方の叔父おじの喪に薄うす鈍色にびの喪服を着けているのも、心の中では亡き愛人への志にもなる似合わしいことであると思つてゐた。顔は少し瘦やせていよいよ艶えんに見えた。お見舞い客が皆去つたあとの静かな夕方であつた。

宮は御病氣らしくお見えにはなつても、ただお氣持ちが重く沈んでしかたがないという御状態にすぎないのであつたから、うと

うとしい人とは御面会にならぬが、お居間の中へ平生はお通しになる御親交のある人たちとはお逢いになるのであつたから、薫を御引見になつたが、その人の顔を御覧になると理由もなく恥ずかしくお思われになり、心弱くなつておいでになるのが隠しきれぬような涙になつて出るのをきまり悪く思召しながらも、よく心持ちをお抑おさえになり、

「たいした病気ではありませんが、だれもが悪くなつてゆく兆候のある容体だと言つて騒ぐものですから、お上かみも中ちゆうぐう宮様も御心配あそばされるのが苦しく思われてね。それにつけてもまた人生の心細さが感ぜられてなりませんよ」

こうお言いになり、ちよつと袖そでで押すほどに拭ぬぐうてお済ませに

なるつもりでおありになつた涙が、どうしたかともなく流れ落ちるのを、見苦しいと思召すのであるが、浮舟のために泣くとは大将に氣のつくはずもなからう、ただ人生にめめしく執着をしていると見えるだけであらうと、薫の心中を御推測のできぬ宮は思つておいでになつた。やはり恋人の死ばかりを悲しんでおいでになるのであつた、いつごろからあつた事実なのであらう、自分を滑稽こっけいな男と長い間笑つておいでになつたのであらうと思ひ、薫は悲しみもそれで忘れることができているのを宮は御覧になり、死んだ愛人に対して非常に冷淡なものである、ものの痛切に悲しい時には全然関係のないことにさえ涙が誘われ、空を鳴いて通る鳥の声にも哀傷の思ひは催されるはずではないか、自分が何の悲

しみによつて病んでいるかを知つたなら、同情から平気には見ておられぬ人なのであるが、人生の無常を深く悟り澄ました人はこんなな冷静なふうでいられるのであろうとうらやましく、御自身の及びがたさをお覚えになるのであるが、「我妹子が来ては寄り添ふ真木柱まきぼしらも睦まじやゆかりと思へば」という歌のように、あの人を愛した男であるとお思ひになるとこの人にさえ愛のお持たれになる兵部卿ひょうぶきょうの宮であつた。この人とある日は向かい合つていたのかとお思ひになると、形見であるというように薫の顔がお見守られになつた。いろいろな世間話を申しているうちに、絶対に浮舟のことは言いださぬという態度はお取りしたくないと思ひ、

「私は昔からどんなこともあなた様に申し上げないで、自分だけで思っているのがとても苦しいのではございますが、今では知らぬまに私のような者も大官になっておりますし、ましてあなた様はいろいろとお忙しい身の上でお閑暇ひまなどはありますまいと存じまして、宿直とのいなどをいつでも申し上げて話を聞いていただくようなこともできません。日を過ごしておりますが、こんなことをひとつお聞きください。昔も御承知のあの山里に若死にをしました恋人と同じ血統ちすじの人が意外な所に一人いると聞きました、昔の人の形見にときどき顔を見て慰めにしようと思つたのですが、ちょうど私といたしましては、そんなことをしては、世間からわけもなく悪く批評をされる時だったものですから、昔の寂しい山里へ

つれて行つてあつたのでございます。そして始終は訪ねて行つてやることもない間柄になつていましたし、その人も私一人にたよる心もなかつたように見えましたが、唯一の妻としては、そうした不純な心のあることは捨ておけないことですが、愛人としておくぶんには許されなくてはならないものですから、可憐かれんに見ておりましたが突然亡なくなつたのでございます。人生の悲哀がまたしみじみと味わわれまして、寂しい思いをしております。もうそのことはお耳にもどちらからかはいつておりますでしょう」

と言つて、この時になつて泣き出した。薰かおるとしてもこれほど悲しむふうはお見せすまいと自戒していたのであつたが、こぼれ始めではとどめがたい涙になつた。その様子に別な意味もあるふう

なのを宮もお悟りになり、気の毒に思召したが、素知らぬふうをあそばした。

「御愁傷をお察しします。そのことは昨日ちよつと聞いたのでした。御弔問をしたく思いましたが、秘密にしておありになるのだとも聞いたものですから」

言葉少なにこうお言いになった。長く言うに堪えがたいお気持ちになつておいでになつたのである。

「お目にかきましたら興味をお覚えになりますだけの価値のある女性でしたが、それは私の思いますだけでなくあなたの奥様のほうの縁故のある人でしたから、もう顔など知つておいでになつたかもしれません」

などと少しほのめかして薫は、

「御病氣中はうるさい世の中のことなどをお耳に入れましては御
安静をお妨げすることになってもよろしくございません。よく御
養生をなさいますし」

と申して辞し去った。非常に悲しがっておいでになった、故人
を哀れな存在とは見たが、現在の帝王と后きとぎがあれほど御大切に
そばされる皇子で、御容貌ようぼうといい、学才と申して今の世に並ぶ
人もない方で、すぐれた夫人たちをお持ちになりながら、あの人
に心をお傾け尽くしになり、修法、読経どきよ、祭り、祓はらいとその道々
で御恢復かいふくのことに騒ぎ立っているのも、ただあの人の死の悲し
みよってのことではないか、自分も今日の身になっていて、帝みかど

の御おんむすめ女を妻にしながら、可憐かれんなあの人を思つたことは第一の

妻に劣らなかつたではないか、まして死んでしまつた今の悲しみ

はどうしようもないほどに思われる、見苦しい、こんなふうには

ほかから見られまいと忍んでるのであるがと薰は思い乱れなが

ら「人非ひとほくせきにあらずみなうじやう木石皆有情しかずけいせい、不如いのいろにあはざるに不逢傾城色」と口ず

さんで寢室にはいった。葬儀なども簡単に済ませたことを宮も飽

き足らず思召したことであろうと哀れに思われて、母の身分がよ

ろしくなくて、異父の弟などが幾人も立ち合つてなどとあとに言

われることを避けて急いでしたのであろうがと不愉快に薰は思つ

た。くわしい様子も聞かないでいることも物足らず思われ、自身

で宇治へ行つてみたいと思うのであるが、喪の家へそのまま忌の

明けるまで籠こもっているのも自分としてははばかりられる、行くだけ行つてすぐに帰るのも心苦しいことであると思ひもだえていた。

月が変わつて、今日は宇治へ行つてみようと薫の思ふ日の夕方の気持ちはまた寂しく、橘たちばなの香もいろいろな連想れんそうを起こさせてなつかしい時に、杜ほととぎす 鶇ねが二声ほど鳴いて通つた。「亡なき人の宿に通はばほととぎすかけて音ねにのみなくと告げなん」などと古歌を口にしたままではまだ物足らず思われ、二条の院へ兵部卿の宮の来ておいでになる日であつたから、橘の枝を折らせて、歌をつけて差し上げた。

忍ねび音や君も泣くらんかひもなきしでのたをさに心通はば

宮は中の君の顔の浮舟によく似たのに心を慰めて、二人で庭をながめておいでになる時であった。言外に意味のあるような歌であると宮は御覧になり、

橘にほの匂にほふあたりはほととぎす心してこそ鳴くべかりけれ

なんだかかかりあいのあるようなことが言われますね。

とお返事をあそばした。宮と浮舟の姫君の関係もまたその人の死も何に基因するかも今は皆わかってしまった中の君は、姉にの女よ王よも妹の姫君も物思いがもとで皆若死にをしたあとに、自分だ

けが残っているのは感情の鈍い質であるからであろうか、それと
いってもいつまでも生きていられることかと心細く思った。宮も
隠してお置きになっても、いずれは知れてしまうことであるのに、
隔てを置いたままであるのは苦しいことであると思召して、浮舟
との関係を少しは取り繕って夫人へお話しになった。

「だれであるのかをあなたがどこまでも隠そうとしたのが恨めし
かったために反発的にそんなことにまで進んでしまったのです
よ」

など、泣きも笑いもしながらお語りになる相手が、恋人の姉で
あることにお慰みになるところも多かつた。形式が簡単でなく、
ちよつとお身体からだの悪いことのあつても騒ぎがはなはだしくなり、

見舞いに集まる人も多く、父の大臣、その息子たちと絶え間なしに病床に付き添っているようなところと変わり、二条の院においてになることは気楽でなつかしい気分を十分お得にされることであつたのである。浮舟の死んだことはまだ夢のようにばかりお思われになり、どうして急にそうなつたかという不審がお解けにならぬため、例の内記たちをお召しになり、右近を呼びにおつかわしになつた。

母の常陸夫人も宇治川の音を聞くと自身も引き入れられるような悲しみが続いたために困つて京へ歸つて行つた。念仏の役を勤める僧だけが頼もしい人のようになかすかな家と見えたが、内記がはいつて行つても、人が来るとすぐに外を見まわりに来るような宿と

直のいの侍もない。今はこうであるのに、あの最後の時にだけはこんな者たちが妨げて宮をお入れしなかつたと時とき方かたらは思い出して悲しんだ。それほどまでに悲しみにおお溺ぼれにならずともよいではないかと、常は非難がましく宮をお思いしている人たちであるが、ここへ来て見ると、あの無理をして通つておいでになつたあの場合、その場合が思い出され、宮にお抱かれして船に乗つた方の美しかつたことなどを思い出すと、だれも心強くなつておられる者はなくなつて皆泣いていた。

右近が出て来て非常に泣くのももつともなことと思われた。宮がこういう思召しで迎えのために自分らをおつかわしになつたということを見ると、今になつて他の女房たちからも怪しいことと

言われ、思われするであろうことが苦しく考えられて、

「まいりましたもよくおわかりいただきまますほどの細かなお話がまだできます自信がございません。お四十九日が済みましたあとで、ちよつと外へまいると申すような体裁を作りましても不自然でないころになりました時、私はもう生きても居られない気はいたしますものの、まだ生き延びておられましたなら、お召しがございませんでも伺いまして、ほんとうに夢のようでしたら、ごさいませぬ」

「悲しいお話も申し上げたいと思います」と言い、今は動きそうにもない。内記も泣いて、

「私は何も細かい御関係のことまでは知らないのですし、事情もわかりませんが、宮様がどんなに深い愛をお持ちになりましたか

ということだけは存じ上げていたものですから、あなたがたとも急いで御懇意にならずとも、しまいには御主人としてお仕えする方についておいでになる方と思ひまして呑氣のんきにして来たのですが、お亡かくれになってはじめてあなたがたにもいろいろと御心配をお掛けしたことが相済まぬ、あなた様はよくお尽くしく下さいました」と感謝の念でいっぱいになり、「心がなりました」

などと言っていた。

「車も宮御自身でお指さし図ずになってお持たせになったのですから、あき車をまた引かせては帰れません。もう一人の方でも来て下さいませんか」

と内記が言うので、右近は侍従を呼び、

「あなたが伺ってください、私の代わりに」

と言った。

「あなたでさえもお話を申し上げる自信が持てないのに、私にどうしてそれができましよう。それにしましても忌中の者がお邸へやしきまいったりすることは縁起の悪いことではございませんか」

「御病気のためにいろいろなふうに御謹慎をなさらねばならなくなつていらつしやいますが、そんなこともかまっておいでにならない御様子なのです。また考えてみますと、あれほどお愛しになつた方のためには宮様御自身が忌におこもりになつてもよろしいわけなのですからね、もう忌の残りが幾日もあるのではないのですから、ぜひお一人だけは来てください」

内記がこう責めるので、侍従も宮の御様子をおなつかしく思い出している心から、もう一度お目にかかりうる機会などというものはありえないことであるから、こうした時にでもと願うようになり、まいることにした。黒い服ながら引き繕つて着た姿はきれいであつた。裳もは現在では主人のいない家であつたから喪の色のも作らなかつたため、淡うすむらさき紫むらさきのを持たせて車に乗つた。姫君がおいでになつたなら、宮にこうして迎えられておいでになつたであらう、自分はその時にお付きして行こうと心にきめていたのであつたがと思ひ出すのは悲しかつた。途中をずっと泣きながら侍従は二条の院へまいった。

兵部卿の宮は侍従の来たしらせをお受けになつても身にしむよ

うにお思われになった。夫人へは恥ずかしくてお話しにはならなかつたのである。宮は寢殿のほうへおいでになり、その廊のほうへ車を着けさせて侍従を下ろさせになった。

浮舟うきふねのことをくわしく聞こうとあそばすと、そのずっと前から煩悶はんもんをし続けていたこと、その前夜にひどく泣いたことなどを言い、

「怪しいほどお口数の少ない方で、内気でいらつしやいましたから、遺言らしいことは何もなさいませんでした。夢にも自殺などという強いことのおできになるとは思われませんでした」

などと侍従が話すことによつて、宮はいつそうお悲しみが深くなり、命数が尽きて死んだということよりも、どんなに物思いを

多くして恐ろしい川へなど身を投げたのであろうと御想像あそばすのが苦しく、その時に見つけることができるとどめえたならば、沸きかえるような心持ちにおなりになるのであるが、今ではすべてむなしいことであつた。

「あのお手紙を始末してお焼きになりました時に、なぜ私らの頭が働かなかつたのでございましょう」

と侍従は言つたりして、夜の明けるまで語つても語り足りないというふうであつた。寺からもらった経巻へ書いて母君の返事にした歌のことなどもお話しした。侍従などは何とも宮の思つておいでにならなかつた女であつたが、哀れに思召すために、

「自分の所にいるがよい。あちらにいる奥さんもあの人には他人

でなかったのだから」

と仰せられたが、

「そうしてお仕えさせていただきましては何も何も悲しいことになりましょう。ともかくもお忌を済ませましてから、どうとも身の振り方を考えます」

侍従はこう申し上げた。

「また来るがいい」

こんな人とすらも別れるのを悲しく宮は思召した。浮舟のために作らせておありになった櫛くしの箱一具、衣いし裳しょう箱一つを宮は贈り物にあそばした。その人のためにお設けになった物は多かつたのであるが、これはただ内記に託しておこしらえになつただけのも

のであつた。

突然山莊を出て来て、こうしたいただ戴き物をして歸つては他の人々が何と思うであろう、少し困つたことであると侍従は思ったのであるが、御辞退のできることもなかつた。

宇治へ歸つた侍従は右近と二人でひそかに櫛の箱と衣箱の衣裳をつれづれなままにこまごまと見た。はなやかなきんしゆう錦繡の服と精巧な作の箱、その中の小箱を見ながらも二人は非常に泣いた。喪にこもっている自分たちはこれをどう隠しておればいいのかということにも苦心を要した。

薫も思い余つて宇治へ行くことにした。途中からもう昔のことかいろいろと胸へ集まつてきて、どんな因縁で八の宮の所へ自分

は行き始めたのであろう、二人の女王に失恋をして、父宮から子とも認められなかった人にまで縁が生じ、この一家との結ばれによつて物思いばかりを自分はし続ける、尊い悟りをお持ちになつた方へ仏の導きで近づき、未来の世界での交わりを約していながら、女王に心を引かれ始めて、信仰をよそにした報いを受けるのであろうと、こんなことも思われた。

大将は右近を前に呼んで話そうとしたが、悲しみが先に立ちるかばかしい質問もできない。

「もう忌の残りの日も少なくなつたのだから済んでからと思つたが、どうしても待ちきれないものがあつて来た。どんな病状でにわかにあの方は死ぬようになられたか」

と問われ、右近は弁の尼なども姫君の遺骸のなくなっていたことは氣どつていたのであるから、隠してもしまいには薰の耳にはいることに違いない、かえつてことを蔽おほおうとして誤解を招くことになつては姫君が氣の毒である、あの不始末を処理するためにはいろいろな嘘うそも言われたのであるが、このまじめな人に対しては、今までも逢あつた時にはこうも弁解しああも言つてと考へていたことは皆忘れてしまい、嘘は恐ろしくなり眞實の話をした。これは薰の想像にもものぼらなかつたことであつたから、驚きのためにはしばらくはものも言われなかつた。それを眞實とは信じがたい、普通の人はんもんが煩悶はんもんをしたり、悲しんだりする場合にも多くは口には言わずおおようにしていた人にどうしてそんな恐ろしいことが思

い立たれるか、そのほかの事実を自分へこう取り繕って言うのではなからうかと、いつそう心の乱れてゆくのを覚える薫であったが、しかしあの人をお隠しになったようでもなく宮が悲しんでおいでになったことは著しいことであつたし、この家の様子も、死が作り事であれば自然に気配けはいが違っているはずであるのに、自分の来たのを見ると人は上から下まで集まって来て泣き騒いでいるではないかと考え、

「奥さんといっしょに行つてしまつた人があるか、もつと詳細にその時のことを言つてくれ。私に誠意がないからほかへ行つてしまふ氣にあの人になつたとは思われぬ。何もなくてにわかになんなことができるか、私は信じていることができない」

と言った。予期した詰問であると右近は恐れた。

「もうおわかりになつていらつしやいましたでしょうが、宮様の姫君としてお育てられになつたのではございませんでしたから、心でいろいろ御苦勞をなされた方でございます。それが寂しいお住まいをなさることになりましたからはいつからともなく物思いをなさいますことになりましたのですが、たまさかにもせよあなた様がおいでになります時のお喜びで過去の不幸も御自身でお慰めになりながらも始終お逢いあそばすことのできますような日の出現を、口に出してはおつしやいませんでした。が始終そればかり待つておいでになつたふうでございました。ようやくそのお望みのかないます御様子と私どもにもうかがえますことがございませ

て、うれしく存じて御用意にかかつておりまして、ひたちのかみ常陸守の奥様もやつとお喜びになることができた御様子でお仕度したくのことなどをあちらからもいろいろとお世話をしていらっしゃいましたところになりましたして、姫君には御合点のゆかぬような御消息がございましたようで、それと同時に宿直とのいをいたしている侍たちが女房の中に品行の修まらぬ者があるとか京のお邸やしきで申されたとか言いだしまして、ものの理解のない田舎いなかの人が無遠慮なことをよく言つてまいたりすることになりますし、あなた様から久しくおたよりもごぞいませんことなどから、自分は薄命なものだと小さい時から知っていたのを、人並みの幸福を得させようと心を砕いておいでになる母君が、また今になって自分が世間の笑われものになつ

たりしては、どんなに力を落とすだろうと、こんなお心持ちをそれとなく私どもへ始終言ってお歎きになりました。それ以外に何があるかと考えましても、何も思い当たることはございません。

鬼が隠すことがありましても片端くらいは残すでしょうのに」

と言つて右近の泣く様子は、見ていても堪えられなくなるほどのものであつたから、宮との例の恋愛の事実は無根でないらしいと悟つた時から少し紛れていた薫の悲しみがよみがえり、せきあえぬふうにこの人も泣いた。

「自分の身が自分の思っているとおりにはできず、晴れがましい身の上になつてしまったのだから、逢つて慰めたいという心の起こる時も、そのうち近くへ呼び寄せ、家の妻にも不安を覚えさせ

ないようにしてから、長い将来を幸福にしたいと、自分をおさえ
てきたのを、誠意がなかったように思われたのも、かえつてあの
人に二心があつたからではないかという気がされる。もうそんな
ことは言わずにおこうと思つたが、だれも聞いていないのだから
事実を私に聞かせてくれ、それは ひようぶぎよう兵部卿の宮様のことだ。い
つごろからのことだったのか、恋愛の技術には長じておいでにな
る方だから、女の心をよくお引きつけになつて、始終お逢いでき
ぬ歎きがこうさせておしまいになり、命もなくしたのではないか
と思う。隠さずに真実を言つてくれ。自分に少しの欺瞞ぎまんもないこ
とを言つてほしい」

かおると薫の言うのを聞いて、確かなことを皆知つておしまいになつ

たようである、この方もお気の毒であるし、故人もおかわいそうである。と右近は思った。

「情けないことをお聞きあそばしたものでございますね。右近がおそばにおらぬ時といつてはございませんでしたのに」

と言ひ、右近はしばらく黙っていたが、

「そんなこともお聞きになつていらつしやいませうが、お姉様の二条の院の奥様の所へ行つておいでになりました時、思いがけずそのお部屋へやへ宮様がお見えになつたことがあるのでございますが、失礼なことも皆でいろいろ申し上げましてお立ち去りを願つたのでございました。実はそれを恐ろしいことに思召して、あの三条の飯屋かりやのような所にしばらくお住いになつたのでございます。

それから決してお在^{ありか}処をお知らせしますまいと警戒をいたしておりましたのに、どういたしましたことか今年^{ことし}の二月ごろからおたよりがまいるようになりました。お手紙はたびたびまいったのですが、丁寧にお頼みになることもございませんでしたのを、もつたいないことで、そうしてお置きになりますことはかえつて悪い結果を生みますと私などがお勧めいたしましたので、一度か二度はお返事をあそばしたことがあつたようでございます。それ以外のことは何もございません」

こう言つた。そう言うべきことである、しいてそれ以上を聞くのもこの人がかわいそうであると薰は思い、じつとひと所をながめながら、宮をお愛したのであろうが、自分をもおろそかには

思えなかつたらしい、迷い迷つて死におもむいたのであろう、自分がかうした寂しい場所へさえ置かなんだならば、世の中の波にもまれることはあつても、自殺までもすることはなかつたであらうと思つると、この川のあるがために悲しい結末を見ることになつたのであると、宇治の流れを憎く思う薫であつた。恋しい人の縁で荒い山路やまみちを往復ゆきかえりすることを何とも思わなかつた薫は、この時になつて宇治という名を聞くことさえいやであるように思つた。宮の夫人がああ姫君のことを初めに戯れて人型ひとがたと名づけて言つたのも、川へ流れてゆく前兆を作つたものであつたかと思つと、何にもせよ自分の軽率さから死なせたという責任も感じられた。母の現在の身分が身分であつたから、葬式なども簡単にし

てしまったのであろうと不快に思ったこともくわしく聞いたことによつて、そうした想像をしたことが気の毒になり、母としてはどんなに悲しがつていることであらう、あの身分の母の子としてはりっぱ過ぎた姫君であつたのを、陰のことは知らずに自分との縁により、姫君が煩悶をしたこともあつたとして悲しんでいることかもしれないなどと同情がされるのであつた。穢れけがというものはこの家にはないはずであるが、供の人たちへの手前もあつて家の上へは上がらず車の榻しじという台を腰掛けにして妻戸の前で今まで薫は右近と語つていたのである。これを長く続けているのも見苦しく思われて茂つた木の下の苔こけの上を座にしてしばらく休んでいた。もう山荘に来てみることも心を悲しくするばかりであらうから、

今後来ることはないであろうと思ひ、その辺を見まわして、

われもまたうきふるさとをあれはてばたれ宿り木の蔭かげをしの
ばん

こんな歌を口ずさんだ。

以前の阿闍梨あじやりも今は律師になつていた。その人呼び寄せて浮う

舟きふねの法事きふねのことを大将は指図さしずしていた。念仏の僧の数を増させ

ることなども命じたのであつた。自殺者の罪の重いことを考えて
その滅罪の方法も大将はとりたい、七日七日に経巻と仏像の供養
をすることなども言い置いて、暗くなつたのに帰つて行く時、あ

の人がいたならば今夜は帰ることではないのであると悲しかった。
尼君の所へ人をやったが、

「私と申すものが凶事 of しるしのように思われまして、心をめい
らせておりますこのごろは、以前よりもいつそうぼけてしまいま
して、うつ伏しに寝やすんだままでおります」

と言ひ、話しに出てこなかつたので、しいて逢おうとは言わな
かつた。

途みちすがら薫は浮舟を早く京へ迎えなかつたことの後悔ばかりを
覚えて、水の音の聞こえてくる間は心が騒いでしかたがなかつた。
遺骸だけでも捜してやることをしなかつたと残念でならないので
あつた。どんなふうになつてどこの海の底の貝かいがら殻がらに混じつてし

まったかと思うと遣瀬やるせなく悲しいのであった。

常陸夫人は京に産をする娘のあるために潔斎潔斎ときびしく言われる家へはいれないで、他のところにおいて悲しみの休ひまむ間もないのである、その娘もまたどうなることかと不安だったがそれは安産した。穢けがれがあつてはこれも見に行くことができないのである、そのほかの子供たちのことも皆忘れたようになり、茫然ぼうぜんとしてゐる時に右大将からそつと使いが来て手紙をもらった。ぼけている心にもそれはうれしかったが、また悲しくもなつた。

思いがけぬ不幸にあい、まずあなたに悲しみを訴えたいと思つたのですが、心が落ち着かず、また涙に目も暗くなる気がして実行はできませんでした。ましてあなたはどんなに悲しんでお

いであることだろう。涙に沈んでおいでになることだろうと思えますと、手紙をあげてもお読みにはなれまいと遠慮も申しているうちに日がずんずんとたちました。人生の常なさがことごとくに形となつてわれらをおびやかします。この悲しみにも堪える力の許されて、私が生きていましたなら、故人の縁のあつた者として何かのことは御相談もしてください。

などとこまやかな心で書かれたものだった。使いにはあの大蔵たゆう大輔が来たのである。

「すべてを気長に考えていたものですから、かなり月日はたつていても、必ずしも私を誠意のある婿とは思つてくださらなかつたでしょう。しかし今は何につけてもあなたの御一家のことは念頭

に置いて忘れますまい。またそのように内々信じてくださつて、お力になるものと思つていてください。小さい息子むすこさんたちもあるそうですが、仕官をおさせになる場合には必ず後援をするつもりで私はいます」

と、言葉でも伝えさせた。ひどく忌む性質の穢れでもないからと言つて、夫人はしいて大輔を座敷へ招じた。そして返事を泣く泣く書いていた。

悲しい思いをいたしますだけでは死なれませぬ命を歎いております私へ、もつたないおいたわりの言葉などのいただけますとは夢想もいたしませんでした。故人がおりました間、心細い様子は見ておりながら、それは私自身の無力からであると存じ

まして、ただおそれ多い行く末かけてのあたたかいお言葉一つを頼みにいたしておりましたが、死なせましてあとではあの地との因縁が悲しくばかり思われてなりません。いろいろと将来のことであれしい仰せを賜りましたことで、命の延びることにもなりました、今しばらく生きてまいれますことになりましたら、その息子たちのことであなた様のお力におすがり申し上げる日もあるうと思えますにつけても、あの人の亡くなつてありませぬ現在の悲しみに目も涙で暗くなるばかりでございまして、感謝の思いも書き尽くすことができせんのをお許しください。

などと書いた。使いへの贈り物に普通の品を出すべき場合では

ないし、またそれだけでは不満足な感じをあとでみずから覚えさせられることであろうからと思ひ、貴重品として将来は故人の姫君に与えようと考へていた高級な斑犀はんさいの石帯せきたいとすぐれた太刀たちなどを袋に入れ、車へ使いが乗る時いっしよに積ませた。

「これは故人の志でございます」

と言わせて贈つたのであつた。

歸つた使いは贈られた品を大将に見せると、

「よけいなことをするものだね」

と薫は言つた。使いの伝えた言葉は、

「奥さんが自身でお逢いになりました、非常に悲しい御様子で、泣く泣くいろいろの話をなさいました。若い息子たちのことまで

も御親切におつしやっていたきましたことはもつたいないこと
 で、うれしく存じますが、しかしながらまたあまりに恐縮な当方
 の身分でございますから、人には何のためにとは絶対に知らせぬ
 ようにいたしましたして、できのよろしい子供たちだけを皆お邸やしきへ差
 し上げることにしましようにとうことでした」

その言葉どおりに奇妙な親しんせき戚せき関係と人には見られることであ
 ろうが、宮中へそうした地方官が娘を差し上げないこともないの
 であるし、また素質がよくて帝王がそれをお愛しになることにな
 ってもお譏そしりする者はないはずである、人臣である人たちはまし
 て世間から無視されている階級の家の娘を妻ひなにしてしている類も多い
 のである、常陸守ひたちのかみの娘であったと人が言っても自分の恋愛の径

路が悪いものであれば指弾もされようが、そんなことではないのであるからはばかりする必要もない、一人の大事な娘を不幸に死なせた母親を、その子ののこした縁故から一家に名誉の及ぶことで慰めるほどの好意はせひとも自分の見せてやらねばならないのが道であると思つた。

母の隠れ家へは常陸守が来て立ちながら話すのであつたが、娘に出産のあつたおりもおりにだれかの触穢しよくえを言い立てて引きこもっていることなどで腹だたいふうに言つていた。去年の夏以来姫君がどこにいるかをありのままには夫人の言つてなかつた常陸守であつたから、寂しい生活をしていることであらうと思ひもし、言ひもしていたのを大将に京へ迎え入れられたあとで、名誉

な結婚をしたと知らせようとも夫人が思っていたうちに浮舟は死んでしまったのであったから、隠しておくのもむだなことであると夫人は思い、薫と結婚をして宇治に住まわせられていたこと、そして病んで死んだ話を泣く泣く語るのであった。薫からもらった手紙も出して見せると、貴人を崇拜する田舎風な性質になつてゐる守は驚きもし臆おくしもしながら繰り返し繰り返し薫の手紙を読んでいる。

「幸福で名誉な地位を得ていて死んだ方だ。自分も大将の家人けいじんの数にはしていただいている者で、お邸へはまいることがあつても近くお使いになることもなかつた。とても気高けだかい殿様なのだ。息子たちのことを言つてくださったのは非常にあれらのために頼も

しいことだ」

こう言つて喜ぶのを見て、まして姫君が大将夫人として生きていたならばと思わないではいられない夫人は、臥ふしまろんで泣いていた。守もこの時になつてはじめて泣いた。しかしながら浮舟が生きているとすれば、かえつて異父弟の世話を引き受けようなどと薫はしなかつたことであろうと思われる。自身の過失から常陸夫人の愛女を死なせたのがかわいそうで、せめて慰めを与えられることだけはしたいと思う心から、他の譏そしりがあるうとも深く氣にとめまいという氣になつていたのである。

薫は四十九日の法事の用意をさせながらも実際はどうあの人はなつたのであろう、まだ一点の疑いは残されていると思うのであ

るが、仏への供養をすることは人の生死にかかわらず罪になることではないからと思ひ、ひそかに宇治の律師の寺で行なわせることにしているのであつた。六十人の僧に出す布施の用意もいかめしく薫はさせた。母夫人も法会には来ていて、式をはなやかにする寄進などをした。兵部卿の宮からは右近の手もとへ銀の壺つぼへ黄金の貨幣を詰めたのをお送りになつた。人目に立つほどの派手はでなことはあそばせなかつたのである。ただ右近が志として供物にしたのを、事情を知らぬ人たちはどうしてそんなことをしたかと不思議がつた。薫のほうからは家司けいしの中でも親しく思われる人たちを幾人もよこしてあつた。在世中はだれもその存在を知らなんだ夫人の法事を、薫がこんなにまで丁寧ていねいに営むことによつて、どん

な婦人であつたのかと驚いて思つてみる人たちも多かつたが、常陸守が来ていて、はばかりもなく法会ほうえの主人顔に事を扱つてゐるのをいぶかしくだれも見た。少将の子の生まれたあとの祝いを、どんなに派手に行なおうかと腐心して、家の中のない物は少なく、支那しな、朝鮮の珍奇な織り物などをどうしてどう使おうと驕おごつた考えを持つていた守ではあつたが、それは趣味の洗練されない人のことであるから、美しい結果は上がらなかつた。それに比べてこの法会の場内の莊嚴をきわめたものになつてゐるのを見て、生きていたならば、自分らと同等の階級に置かれる運命の人でなかつたのであつたと守は悟つた。兵部卿の宮の夫人も誦經ずきようの寄付をし、七僧への供膳きようぜんの物を贈つた。

今になって隠れた妻のあつたことを帝もみかどお聞きになり、そうした人を深く愛していたのであろうが、女二にょにの宮みやへの遠慮から宇治などへ隠しておいたのであろう、そして死なせたのは気の毒であると思召した。

浮舟の死のために若い二人の貴人の心の中はいつまでも悲しくて、正しくない情炎の盛んに立ちのぼっていたところにそのことがあつたため、ことに宮のお歎きは非常なものであつたが、元来が多情な御性質であつたから、慰めになるかと恋の遊戯もお試みになるようなこともようやくあるようになった。薫は故人ののこした身内の者の世話などを熱心にしてやりながらも、恋しさを忘れなく思っていた。

ちゆうぐう

中宮もまだそのままおじ叔父の宮の喪のために六条院において

になるのであつたが、二の宮はそのあいた式部卿にお移りになつた。お身柄が一段重々しくおなりになつたために、始終母宮の所

へおいでになることもできぬことになつたが、ひようぶきよう兵部卿の宮は寂しく悲しいままによくおいでになつては姉君のいつほん一品の宮の御殿を慰め所にあそばした。すぐれたびぼう美貌であらせられる姫宮をよ

く御覧になれぬことを物足らぬことにしておいでになるのであつ

た。右大将が多数の女房の中で深い交際をしているこさいしやう小宰相という人はようぼう容貌などもきれいであつた。価値の高い女として中宮も愛しておいでになつた。琴のつまおと爪音も琵琶のびわ撥音も人よりはす

ぐれていて、手紙を書いてもまた人と話しをしても洗練されたと

ころの見える人であった。兵部卿の宮も長くこの人に恋を持っておいでになるのであつて、例の上手じょうずに説き伏せようとお試しになるのであるが、誘惑をされてだれも陥るような御関係を作りたくないといふ強い態度を変えないのを、薫かおるはおもしろい人であると思つて好意が持たれるのである。このごろの薫が物思いにとらわれているのも知つていて、黙つていふことができぬ気もして手紙を書いて送つた。

哀れ知る心は人におくれねど数ならぬ身に消えつつぞ経ふる

私が代わつて死んでおあげすればよかつたように思われます。

と感じのよい色の紙に書かれてあつた。身にしむような夕方時のしめつぽい気持ちをよく察して訪ねたずの文ふみを送つた心持ちを薫は感謝せずにはおられなかつた。

つれなしとこころ世を見るうき身だに人の知るまで歎きやはする

これを返歌にした。

答礼のつもりで、

「寂しい時の御慰問のお手紙はことにありがたく思われました」と言い小宰相の家を薫は訪ねたずて行つた。貴人らしい重々しき

が十分に備わり、こんなふう^にに中宮の女房の自宅へなど、今までは一度も行つたことのない薫が訪ねて来た所としては貧弱な邸^{やしき}であつた。局^{つぼね}などと言われる狭い短い板の間の戸口に寄つて薫の坐^ざしているのを片腹痛いことに思う小宰相であつたが、さすがにあまりに卑下もせず感じのよいほどに話し相手をした。失つた人よりもこの人のほうに才識のひらめきがあるではないか、なぜ女房などに出たのであろう、自分の妻の一人として持つていてもよかつた人であつたのにと薫は思つていた。しかしながら友情以上に進んでいこうとするふうを少しも薫は見せていなかった。

蓮^{はす}の花の盛りのころに中宮は法華^{ほけ}経の八講を行なわせられた。六条院のため、紫夫人のため、などと、故人になられた尊親のた

めに経卷や仏像の供養をあそばされ、いかめしく尊い法会ほうえであつた。第五卷の講ぜられる日などは御陪観する価値の十分にあるものであつたから、あちらこちらの女のてづる手蔓を頼んで参入して拝見する人も多かつた。五日めの朝の講座が終わつて仏前の飾りが取り払われ、室内の裝飾を改めるために、北側の座敷などへも皆人がはいつて、旧態にかえそうとする騒ぎのために、西の廊の座敷のほうへ一品の姫宮は行つておいでになつた。日々の多くの講義に聞き疲れて女房たちも皆部屋へやへ上がつていて、お居間に侍している者の少ない夕方に、薫の大将は衣服を改めて、今日退出する僧の一人に必ず言つておく用で釣つりどの殿のほうへ行つてみたが、もう僧たちは退散したあとで、だれもいなくなつたから、池の見える

ほうへ行つてしばらく休息したあとで、人影も少なくなつてい
のを見て、この人の女の友人である小宰相などのために、隔てを
仮に几帳きちようなどでして休息所のできているのはこちらであらうか、
人の衣擦きぬずれの音がすると思ひ、内廊下の襖からかみ子の細くあいた所か
ら、静かに中をのぞいて見ると、平生女房級の人の部屋へやになつて
いる時などとは違ひ、晴れ晴れしく室内の装飾ができていて、幾
つも立ち違いに置かれた几帳はかえつて、その間から向こうが見
通されてあらわなのであつた。氷を何かの蓋ふたの上に置いて、それ
を割ろうとする人が大騒ぎしている。大人おとなの女房が三人ほど、そ
れと童女がいた。大人は唐衣からぎぬ、童女は衫かぎみも上に着ずくつろいだ
姿になつていたから、宮などの御座所になつてゐるものとも見え

ないのに、白い羅うすものを着て、手の上に氷の小さい一切れを置き、騒いでいる人たちを少し微笑をしながらながめておいでになる方のお顔が、言葉では言い現ぐしわせぬほどにお美しかった。非常に暑い日であったから、多いお髪ぐしを苦しく思召すのか肩からこちら側へ少し寄せて斜めになびかせておいでになる美しさはたとえるものもないお姿であった。多くの美人を今まで見てきたが、それらに比べられようとは思われない高貴な美であった。御前にいる人は皆土のような顔をしたものばかりであるとも思われるのであったが、気を静めて見ると、黄すすしの涼絹ひとえの単衣うすむらさきに淡紫もの裳をつけて扇を使っている人などは少し気品があり、女らしく思われたが、そうした人にとって氷は取り扱あいにくそうに見えた。

「そのままにして、御覧だけなさいましよ」

と朋輩ほうばいに言つて笑つた声に愛嬌あいきょうがあつた。声を聞いた時

に薫は、はじめてその人が友人の小宰相であることを知つた。とどめた人のあつたにもかかわらず氷を割つてしまつた人々は、手ごとに一つずつの塊かたまりを持ち、頭の髪の上に載せたり、胸に当てたり見苦しいことをする人もあるらしかつた。小宰相は自身の分を紙に包み、宮へもそのようにして差し上げると、美しいお手をお出しになつて、その紙で掌てをおぬぐいになつた。

「もう私は持たない、雫しずくがめんどうだから」

と、お言いになる声をほのかに聞くことのできたのが薫のかきりもない喜びになつた。まだごくお小さい時に、自分も無心にお

見上げして、美しい幼女でおありになると思った。それ以後は絶
対にこの宮を拝見する機会を持たなかつたのであるが、なんとい
う神か仏かがこんなところを自分の目に見せてくれたのであろう
と思ひ、また過去の経験にあるように、こうした隙見すきみがもとで長
い物思ひを作らせられたと同じく、自分を苦しくさせるための神
仏の計らいであろうかとも思われて、落ち着かぬ心で見つめてい
た。ここの対の北側の座敷に涼んでいた下級の女房の一人が、こ
の襖からかみ子こは急な用を思いついてあけたまままで出て来たのを、この
時分に思い出して、人に気づかれては叱しかられることであろうとあ
わてて帰つて来た。襖子に寄り添のうしった直衣姿の男を見て、だれで
あろうと胸を騒がせながら、自分の姿のあらわに見られることな

どは忘れて、廊下をまつすぐに急いで来るのであった。自分はすぐにここから離れて行ってだれであるとも知られまい、好色男らしく思われることであるからと思い、すばやく薫は隠れてしまった。その女房はたいへんなことになった、自分はお几帳きちょうなども外から見えるほどの隙すきをあけて来たではないか、左大臣家の公きん達ちなのであろう、他家の人がこんな所へまで来るはずはないのである、これが問題になればだれが襖子をあげたかと必ず言われるであろう、あの人の着ていたのは単衣ひとえも袴はかまも涼絹すずしであったから、音がたたないで内側の人は早く気づかなかつたのであろうと苦しんでいた。

薫は漸く僧に近い心になりかかった時に、宇治の宮の姫君たち

によつて煩惱ぼんのうを作り始め、またこれからは一いっぽん品の宮みやのために物思ものしいを作る人になる自分なのであろう、その二十はたちのころに出家をしていたなら、今ごろは深い山の生活にも馴なれてしまい、こうした乱れ心をいまくことはなかつたであらうと思ひ続けられるのも苦しかつた。なぜあの方を長い間見たいと願つた自分なのであろう、何のかがあろう、苦しいもだえを得るだけであつたのにと思つた。

翌朝起きた薫は夫人の女二の宮の美しいお姿をながめて、必ずしもこれ以上の御美貌びぼうであつたのではあるまいと心を満ち足りたようにしてしながら、また、少しも似ておいでにならない、超人間的にまであの方は氣品よくはなやかで、言いようもない美し

さであつた。あるいは思いなしかもしれぬ、その場合がことさらに人の美を輝かせるものだったかもしれぬと薫は思い、

「非常に暑い。もつと薄いお召し物を宮様にお着せ申せ。女は平生と違つた服装をしていることなどのあるのが美しい感じを与えるものだからね。あちらへ行つて大弔だいにに、薄物の单衣ひとえを縫つて来るように命じるがいい」

と仰いだした。侍している女房たちは宮のお美しさにより多く異彩の添うのを楽しんでの言葉ととつて喜んでいた。いつものように一人で念誦ねんずをする室へやのほうへ薫は行つていて、昼ひるごろに来てみると、命じておいた夫人の宮のお服が縫い上がつて几帳きちようにかけられてあつた。

「どうしてこれをお着にならぬのですか、人がたくさん見ている時に肌はだの透く物を着るのは他をないがしろにすることにちあたりませんが、今ならいいでしょう」

と薫は言つて、手ずからお着せしていた。宮のお袴はかまも昨日の方と同じ紅であつた。お髪ぐしの多さ、その裾すそのすばらしさなどは劣つてもお見えにならぬのであるが、美にも幾つの級があるものか女二の宮が昨日の方に似ておいでになつたとは思われなかつた。氷を取り寄せて女房たちに薫は割らせ、その一ひとかたまり塊を取つて宮にお持たせしたりしながら心では自身の稚態がおかしかつた。絵に描かいて恋人の代わりにながめる人もないのである、ましてこれは代わりとして見るのにかげ離れた人ではないはずであると思ふ

のであるが、昨日こんなにしてあの中に自分もいつしよに混じつていて、満足のできるほどあの方をながめることができたのであったなと思うと、心ともなく歎息の声が発せられた。

「一品の宮さんへお手紙をおあげになることがありますか」

「御所にいましたころ、お上かみがそうおっしゃったものですから、差し上げたこともありましたが、ずいぶん長く御交渉はなくなっています」

「人臣の妻におなりになったからといって、あちらからお手紙をくださらなくなつたのでしようが、悲観させられませんね。そのうち私から中宮へあなたが恨んでおいでになると申し上げよう」

と薫は言う。

「そんなこと、お恨みなど私はしているものでございますか。いやでございます」

「身分が悪くなったからといって、けいべつ輕蔑をなさるらしいから、こちらからは御遠慮して消息を差し上げないとそんなふうに言いましよう」

こんなことを言つてその日は暮らし、翌日になつて大將は中宮の御殿へまいつた。例のひようぶきよう兵部卿の宮も来ておいでになつた。

ちようじ丁子の香と色の染しんだ羅うすものの上に、濃のうしい直衣を着ておいでになる感じは美しかった。一いっぽん品の宮みやのお姿にも劣らず、白く清らかな

皮膚の色で、以前より少しお瘦やせになつたのがなおさらお美しく見せた。女宮によく似ておいでになるといふことから、またおさ

えている恋しさがわき上がるのを、あるまじいことであると思ひ、静めようとするのもあの日の前には知らぬ苦しみであつた。兵部卿の宮は絵をたくさんに持つて来ておいでになつたが、そのうちの幾つかを女房に姫宮のほうへ持たせておあげになり、御自身もあちらへおいでになつた。

薫は後の宮のお近くへ寄つて行き、御八講の尊かつたことを言ひ、六条院のことも少しお話し申し上げながら、残つた絵を拝見している時に、

「私の所に来ておいでになります宮さんが、宮廷から離れて屈託した気持ちになつておられますのをお気の毒だと見ております。一品の宮様のお消息などをいただけませんことを人妻に降つたこくだ

とで愛をお捨てになつたように思つて楽しまないふうなのでございますが、こういたしたものだをときどき見せてあげてください。私がいかがでしょう。私がその使いはいたします。私どものほうのも持つてまいります」

と中宮へ申し上げると、

「まあそんなことで御交際をおやめになるものですか。同じ御所の中におられたころは、近いものですからときどき手紙が通つたのでしようが、遠く離れ離れにおなりになつた時からお手紙が途絶え始めて、そのままになつたことなのでしよう。そのうち私からお勧めしてお書きになるようにしますよ。そちらからだつてお手紙をお送りになればいいのにね」

と、宮は仰せられた。

「そちらからは出過ぎたように思われておできにならないのでしょう。初めから御交渉のなかつた方にいたしましても、私と宮様がたとの縁の続きに愛しておあげくださることになるのがうれしい成り行きなのですが、まして以前から御交際のあつた間柄でありになるのですから、私の所へ来られましたあとでお捨てになるのは、あの宮さんにとっておかわいそうなことです」

などと申しているのを、恋が言わせることと中宮はお悟りにならなかつた。

薫は中宮のお居間を辞して、先夜の好意のある女友人にも逢おう、あの思い出の廊の座敷を心の慰めに見て行こうと思ひ、縁側

伝いに西に向いて歩いて行つた。御簾みすの中にいる女房たちはそれだけのことにすら心づかいのされる薫の大將であつた。渡殿わたどののほうには左大臣の息子らがいて、女房たちと話し合っている様子であつたから、この人は妻戸のところになすわつて、

「始終この院へはまいっている私ですが、こちらの宮様の御殿へ伺うことができないでいますと、自然老人めいた気持ちになるよ
うになつたのですが、これからはそうしてしまいと決心してま
つたのですよ。馴なれない人間の恰かつこう好こうは滑稽こっけいなものに若い人た
ちからは見られることでしょう」

甥おいの公子たちのほうを見ながらこう言つていた。

「ただ今からお習いになりましたなら新鮮なお若さが拝見される

ことでしよう」

などと戯れて言う女房らからも怪しいまでの高雅な感じの受け取られるのであった。何をおもな話題にするというのでもなく、世間話を平生よりもしんみりと話し込んで薫かおるはいた。

姫宮は ちゆうぐう 中宮の御殿のほうへおいでになった。後の宮が、
「大将があちらへ行きましたか」

とお尋ねになると、一品の宮のお供をしてこちらへ来た大納言の君が、

「小宰相に話があると言っていていらつしやいました」
と申した。

「まじめな人であつて、さすがに女の友だちにも心の惹ひかれると

ころがあつてむだ話もして行きたいのだろうがね。才能のない人が相手をしては恥ずかしい。女の価値がすぐ見破られるからね。小宰相ならまず安心だけけれど」

こんなことをお言いになる宮は、御弟なのであるが、薫に周囲を観察されることを恥ずかしく思召し、女房らも飽き足らず思われるところを見せぬようにしてほしいと思召すのである。

「あの人をだれよりも御ひいきになさいまして、部屋のほうへも寄つてお行きになることがよくあるようでございます。しんみりとお話をしておいでになることもございました夜がふけてお帰りになることはありまして恋愛関係と申すようなことはなさそうに思われます。あの人兵部卿の宮様の御性情には反感を持つてお

りまして、お返辞すらよくいたさないうでございませぬのはもつ
たいないことでございます」

と言ひ、大納言の君が笑うと、中宮もお笑いになつて、

「あの宮の多情な本質が直感できるのだからいいね。どうしてあ
の方の悪癖を直させたらいいだろう、恥ずかしいと私は思う。だ
れも皆そう思っているだろうね」

こうお語りになつた。

「妙な話を私は聞いたのでございます。あの大将さんのお亡なくしに
なりました人は兵部卿の宮様の二条の院の奥様のお妹さんだつた
そうでございます。前常陸守の妻はその方の叔母おぼであるとも、母
であるとも申しますのはどういふ理由わけであるのかよく存じませぬ。

その大将の愛人の所へそつと兵部卿の宮様も通つてお行きになつたということでございまして、大将さんがそれをお聞きになりましたのか、にわかには宇治から京へ迎えようとなすつて、監視の人などをきびしくお付けになりましたところに、宮様はまたおいでになつたのでございますが、家の中へおはいりになることができませんで、危険なことでございますが、お馬のまま外に立つておいでになり、それなり帰つておしまいになつたということでございまして、女も宮様をお慕いしていたのでしようか、にわかに行かえがわからなくなりましたのを、川へ身を投げたのであろうと、乳母うばというような者が泣き騒いで言つていたそうでございます」

大納言の君はこんな話を申し上げた。中宮がお驚きになつたこ

とは言うまでもない。

「だれがまあそんな噂うわきばなし話なしをしていたの、ほんとうにかわいそうな話ではないか。そんな出来事はすぐ噂になるものなのに、そうでもなし、また大将もそんなふうには話さずに、人生の悲哀を強調して話すだけで、また宇治の宮さんの一族が皆短命で死ぬのは悲しいことだとは言っていたけれども」

「ほんとうでございますか、どうでございますか、しもぎまの者は確かでないこともほんとうらしく話にいたすものですが、その宇治の山荘におりました下しもわらわ童わらわがついこのごろ宰相の実家のほうへ来まして、確かなことのように申していたそうでございます。そうした死に方をなさいましたことを世間へ知らすまい、自殺な

どという思いきつたことをした人だと言わずまいと皆が隠すことに骨を折ったそうでございます。それで大将さんもくわしいお話をあそばさなかつたのではないでしょうか」

「その話をまたほかへ行つてするなと宰相からお言わせよ。そうした問題で宮は自身をだいなしにしておしまいになることにもなり、世間からも軽蔑けいべつされることにおなりになるだろう」

こうお言いになつて、中宮は非常に御心配をあそばす御様子であつた。

それからまもなく一品の宮から女二の宮へお手紙が来た。御手跡のおみごとであるのを見ることのできたことが薫にはうれしくて、期待にはずれないごりつぱさである、もつと早くこれが拝見

できる方法を講ずべきであつたなどと思つた。多くの美しい絵などを中宮からもお送りになつた。お礼として薫からもそれにまされた絵を集めて差し上げることにした。小説の芹川せりかわの大將が女一の宮を恋して秋の日の夕方に思い侘わびて家から出て行くところを描かいた絵はよく自身の心持ちが写されているように思われる薫であつた。その人のように成功すべき恋でないのが残念であつた。

荻をぎの葉に露吹き結ぶ秋風も夕べぞわきて身にはしみにける

と書き添えたい気がするのであるが、そうしたことは氣けぶりにも知れたならばどんなことの言われるかしれぬ世の中であるから

と、思うことすらも洩^もらしがたい恋に心を悩ませ、はては宇治の大姫君さえ生きていてくれたならば、その人を妻とすることができていたのであれば、どんな人を見ても心の動揺することなどはなかつたはずである。現代の帝王の御^{おんむすめ}女を賜わるといっても、自分はお受けをしなかつたはずである、また自分がそれほど愛している妻があるとわかつておいでになつて姫宮をお嫁^{とつ}がせになることもなからう、何といつても自分の心の混乱し始めたのは宇治の橋姫のせいであると、こんなことを思つてゆくうちに薫の心はまた二条の院の女王の上に走つて、恋しくも恨めしくもなり、取り返されぬ昔を愚かしいまでに残念に思つた。もうどうすることもできないことなのであると、それを心に片づけたあとでは、ま

た自殺をしてしまった浮舟うきふねが、思想的に幼稚でよこしまな情熱に逢あつてたちまち動かされていった軽率さを認めながらも、さすがに煩悶を多くしていたこと、そのころに自分の気持ちの変わったことで、自責の念から歎きに沈んでいた様子を宇治で聞いて知ったことも思い出され、妻というような厳粛な意味の相手ではなく、心安く可憐かれんな愛人としておきたいと思うのにはふさわしくかわい女性であったと考えられ、もう宮に不快の念を持つまい、女をも恨むまい、ただ自分の非常識から若い愛人をああした場所へ置き放しにしていたのがあやまちの原因だったのであると、こんなふうには物思いの末にはあきらめをつけることにもなった。

静かな落ち着いた薫さえこんなふうには恋愛については身体からだにも

さわるほどな苦しきも時には味わうのであるから、まして浮舟をお失いになった兵部卿の宮は心を慰めかねておいでになって、その人の形見の人として悲しみを語り合う人さえもおありでなく、対の夫人だけは哀れな人であつたと言つてくれはするものの、姉き妹ようだいとして交わつていた期間はわずかなことであつたから、深い悲しきは覚えているはずもない、また宮としては思召すままに恋しい悲しいとお言いになることも、夫人に向かつてのことであるからお心のとがめられることであるために、あの山荘の侍従をお呼び寄せになつた。女房たちは皆ちりぢりに去つてしまつたあとに、乳母めのとと右近、侍従だけは故人が最も親しんだ人たちであつたから、喪の家から離れず、一方は親子であつて、侍従は関係の

ない間柄ではあるが、いっしよに山莊へ残つて暮らしていたのであつたが、荒々しい川音を聞くのも、そのうち京の邸やしきへ姫君の迎えられて行く日を楽しみにして辛しんぼう抱ほうされたものの、情けなく、気味悪くばかり思われて、京のちよつとした知り合いの家へこのごろは侍従だけが移つて来ていた。宮がお捜させになつてこのまゝ二条の院の女房になるようにと仰せになるのであつたが、夫人はともかくも、他の女房たちから浮舟の姫君と宮とのあるまじい情交の起こつていたことで何かと非難がましいことを言われるであらうことが思われお受けをしなかつた。中宮の女房になつてお仕えしたいとそれとなく内記に言つてもらふと、

「それはよい。そして自分が陰で勤めよくなるようにしてやろう」

と言う宮のお返辞であつた。侍従は姫君を失つた心細さも慰むかと思ひ、手蔓てづるを求めて目的の宮仕えをする身になつた。見た目のきれいな下級女房であると人も認めて、侍従は悪くも言われていなかつた。大将もよくまいるのを蔭かげで見ると昔が思われる物哀れな心になつた。貴族の姫君たちだけのお仕えしている場所だと聞いていて、そうした上の女房たちの顔をこのごろ皆見知るようになつてから考えても、浮舟の姫君ほどの美貌の人はないようであつた。

今年の春お薨かくれになつた式部卿しきぶきょうの宮の姫君を、継母まははの夫人が愛しないで、自身の兄の右馬頭うまのかみで平凡な男が恋をしているのに、姫君をかわいそうとも思わずに与えようとしていることを中

宮へある人から申し上げると、

「気の毒な、宮様がたいへん大事になすった女によ王おうさんを、そんなすた靡り者にしてしまおうとするなどとは」

とあわれ憐んで仰せられた。

「たよりにない心細い思いをしているあなたにそうしたあたたかい同情を寄せてくださるのだから、中宮へお仕えしたら」

と、兄の侍従も宮仕えを勧めた女王を、このごろ中宮は手もとへ侍女にお迎えになった。女によいち一みやの宮のお相手として置くのによい貴女きじよと思召して、特別な御待遇を賜わって侍しているのであるが、お仕えする身であるかぎり、やはり宮の君などと言われ、唐からぎぬ衣ぬまでは着ぬが裳もだけはつけて勤めているのは哀れなことで

あつた。ひようぶぎよう兵部卿の宮は、この人だけは恋しい故人に似た顔をして
しているであろう。式部卿の宮と八の宮は御兄弟なのであるから
などと、例の多情なお心は、昔の人の恋しいために、新たな好奇
心もお起こしになることがやまず、いつとなく宮の君を恋の対象
としてお考えになるようになった。

人生は味気ないとこの女王についても薫は思うのであつた。ま
だ昨今というほどのことではないか、東宮の後宮へお入れになろ
うと父宮が思いになり、自分へも娶めとらせようとされた姫君であ
る、栄えた人のたちまち衰えてゆくのを見ては、水へはいつてし
まった人はそれを見ぬだけ賢明であつたかもしれぬなどと薫は思
い、他の女房に対するよりもこの女王に好意を寄せていた。

六条院に 中宮ちゆうぐうのおいでになることは、宮中のお住居すまいよりも

広く住みよくだれも思い、時々まいるだけで始終は侍していぬ人までも皆上がって来ていて、はるばると多く続いた対、廊、渡殿の座敷は女房で満ちていた。左大臣は父君の院の御在世当時に劣らず中宮のためにあらゆる物をととのえて奉仕していた。末広がりになった一族であつたから、かえって昔よりも六条院のはなやかさはまさつてさえ見えた。兵部卿の宮が今までのようなふうでおありになれば、この集まつた女性の中のある人々とその幾月かのうちにはどんな問題を起こしておいでになるかもしれないのであるが、すっかりと冷静におなりになり、人から見れば少し性質がお変わりになったかと思われたのであるが、近ごろになつて

また宮の君にお心を惹かれ、御本性どおりにつきまとしておいでになった。

秋冷の日になって中宮は宮中へ帰ろうとあそばされるのであったが、秋の盛りの紅葉もみじの季にここで逢えないのは残り惜しいことであると若い女房たちは言い、だれも皆実家にいず、このごろは六条院にまいつていた。水を愛し、月の景色けしきを喜んで音楽の催しなども常にあつた。兵部卿の宮は常よりもはなやかな六条院を愛して、この空気を中心のようになっておいでになるのである。朝夕にお顔を見ていながらも、いつも今咲きそめた花に逢あう気のされる兵部卿の宮であつた。薫はそれほど入り立っていないのであるために、若い中宮の女房たちは、この人が来れば緊張してしま

うのであった。ちようどこの二人の若い貴人の同時に中宮のお居間に来合わせている時であったが、宇治にいた侍従は物蔭からぞいて、どちらにもせよこのりっぱな方々の一人に愛されて生きておいでになればよかった。恵まれておいでになった幸運をわれから捨てておしまいになった姫君であると思い、他の人には宇治の山荘のこと、薫の愛人であった姫君のことなどは知ったふうには言っていないことであつたから心一つに残念がついていた。兵部卿の宮が御所のお話などを細かく母宮へしかかかっておいでにもなつたため、薫がお居間を出て行こうとするのを見、自分を見つけさすまい、一年の忌の来るのも済まさずに宇治を去つたのは故人へ情のないことであるとは思われたくないと思ひ、侍従はすぐに隠

れてしまった。

東の廊の座敷のあいた戸口に女房たちがおおぜいいてひそひそと話などをしている所へ薫は行き、

「私をあなたがたは親しい者として見てくださるでしょうか、女にだって私ほど安心してつきあえるものではありませんよ。それでも男ですから、あなたがたのまだ聞いていない新しい話も時にはお聞かせすることができのですよ。おいおい私の存在価値がわかっていただけるだろうという自信がそれでもできましたからうれしく思っています」

こんな戯れを言いかけた。だれも晴れがましく思い、返辞をしにくく思っている中に、弁の君という少し年輩の女が、

「お親しみくださる縁故のない者がかえって私のように恥じて引
つ込んでいないことになります。ものは皆合理的にばかりなつて
ゆくものではございません。だれの家のだれの子でござい
ますからと申しておつきあいを願うわけのものでもありませんけ
れど、羞恥心しゆうちを取り忘れたようにお相手に出ました者はそれだ
けの御挨拶あいさつをいたしておきませんではと存じますから」

と言つた。

「羞恥心も何も用のない相手だと私の見られましたのは残念です
ね」

こんなことを薰かおるは言いながら室へやの中を見ると、唐衣からぎぬは肩から
はずして横へ押しやり、くつろいだふうになつて手習いなどを今

までしていた人たちらしい。すずりふた硯の蓋に短く摘んだ草花などが置かれてあるのはこの人らがもてあそんだものらしい。ある人は几帳の立てである後ろへ隠れ、ある人は向こうを向き、ある者は押しあけられてある戸に姿の隠れるようにしてすわっているの、頭の形だけが美しく見えた。すべて感じよく思つて薫は硯を引き寄せ、

をみなへし女郎花乱るる野べにまじるとも露のあだ名をわれにかけめ
や

こう書いて、

「安心していらつしやればいいのに」

と言ひ、すぐ近くの襖からかみ子のほうを向いている人に見せると、

相手は身動きもせず、しかもおおように早く、

花といへば名こそあだなれをみなへしなべての露に乱れやは
する

と書いた。手跡は、少ない文字であるが気品の見える感じよいものであるのを、薫は何という女房であろうと思つて見ていた。

今から中宮のお居間へこの戸口を通つて行こうとして、薫の来た
ために出るにも出られずなつた人らしく思われた。弁の君は、

「わぎと老人じみたことをお言いになつては反感が起こるもので
すよ」

と言ひ、

「旅寝してなほ試みよをみなへし盛りの色に移り移らず

そのあとであなたをどんな性質で、お堅いともそうでないとも、
きめましよう」

とも言う。

宿貸さば一夜は寝なんおほかたの花に移らぬ心なりとも

薫が言ったのである。

「私を侮辱あそばすのでございますね。自分のことではございませんよ。一般的に抗議を申し上げただけでございます」

と弁は言う。こんなふうに戯れ言も薫は長くは言っていないらしく見えるのを若い女房たちは飽き足らず思っていた。

「思いやりのないことをしましたね。あなたの道をあげましょう。とりわけて私に顔をお見せにならない態度には理由のあることでしょう」

と言い、薫の立つて行くのを見て、だれもが弁のようにはしやぐ者のように思われぬかと気にする人もあった。東の高欄により

かかつて、叢くさむらの中に夕明りを待つて咲きそめる花のある植え込みを薫はながめていた。何も皆身にしむように思われる薫は、「就なかんづくはらわたをたつはこれあきのてん
中 断腸 是 秋 天」と低い声で口ずさんでいた。先刻の人らしい衣きぬず擦れの音がして、中央の室へやから抜けてあちらへ行つた。兵部卿の宮がそこへ歩いておいでになつて、

「ここから今あちらへ行つたのはだれか」

と他の者に尋ねておいでになつた。

「一いっぽん品の宮みや様のほうの中将さんでございます」

と答える声も御簾みすの中でした。おもしろくないことである、だれであろうとかりそめにもせよ好奇心の起こつた人が、すぐにだれそれであると名ざしをして聞かれるではないか、とその女が

わいそうに思われ、また兵部卿の宮には皆よくお馴れなしていて、隠すところもなくなっているのがなんとなくうらやましい気もする薫であった。自由に接近してお行きになることができ、上手じょうずな技巧で誘惑をあそばされては女も負けることになるのであろう、自分にはそんなことができず、こちらの人たちとは、縁の遠いとうとしいものになっているのが残念である。侍している人の中で、どうかして近ごろ兵部卿の宮がはげしく恋をしておいになる人を自分のものにして、あの時に自分が苦しんだような思いを宮にもお味わわせしたい。聡明な女であれば自分のほうを愛するはずであるとは思われるが、こちらの考えどおりな心を持っていいのかどうかは頼みになるものでないと思われるにつけても、二条

の院の女王が、宮のああした御放縦な恋愛生活を飽き足らず見て、自分の愛を頼むようになり、それを恋にまでなつてはならぬ、世間の批評がうるさいと思ひながら友情だけはいつも捨てぬのは珍しく聡明な態度で、自分としてはうれしかぎりである、そんなすぐれた女性はこれのおおぜいの若い女房たちの中に一人でもあるであろうか、深く接近して見ぬせないように思われる、物思いに寝ざめがちな慰めに恋愛の遊戯も少し習いたいと思うが、もう今は似合わしくないと薫は思った。例の氷を割られた日の西の渡殿へ、その日のようにふらふらと薫が来てしまったのも不思議であつた。姫宮は夜だけ母宮の御殿のほうへおいでになるため、もうお留守になつていて、女房たちだけで月を見ると言い、渡殿

に打ち解けて集まっていた。十三絃げんの琴を懐しい音ねで弾ひくのが聞こえた。人々の思いもよらぬこんな時に薰かほが出て来て、

「なぜ人を懊惱おうのうさせるように琴など鳴らしていらつしやるのですか。(遊仙窟いうせんくつ。耳聞みにきく猶なほ氣絶きたえんとす、眼見めにみて若いか為かり」

憐かな憐らん」

こう言うのに驚いたはずであるが、少し上げた御簾みすをおろしなどもせず、一人は身を起こして、

「崔季珪さいきけいのようなお兄様がいらつしやるかしら」

と言う。その声は中将の君といわれていた女であつた。

「私は宮様の母方の叔父おじなのですよ。(遊仙窟。容貌かんばせはをぢはんあ

舅んじんににたりぐわいせいなればなり、きざしはあにさいきけいのごとしいもうとなればなり
 潘安ばんあん、仁外甥、氣調如兄にうし、崔季珪小妹せうめい

「」

こんな冗談じょうだんを言ったあとで、

「いつものように中宮様のほうへ行っておしまいになったのですか
ようね、宮様はお里住まいの間は何をしていらつしやるのですか」
思わずこんな問いを薰は発することになった。

「どこにいらつしやいまして、別にこれという変わったことは
あそばしません。ただいつもこんなふうでお暮らしになつていら
つしやるばかり」

聞いていて美しいお身の上であると思うことで知らず知らず歎
息の声の洩もれて出たのを、怪しむ人があるかもしれぬと思う紛ら
わしに、女房たちが前へ出した和琴わごんを、調子もそのままでかき鳴

らす薫であつた。律の調べは秋の季によく合うと言われるものであつたから、気も入れて弾かぬ琴の音であるが、みずから感じの悪いものとは思われぬものの、長くも弾いていなかつたのを、熱心に聞きいつていた人たちはかえつて残り多さも出て苦しんだ。

自分の母宮もこの姫宮に劣る御身分ではない、ただ后腹というわずかな違いがあつただけで朱雀院すざくの帝みかどの御待遇も、当帝の一品いっぽん

の宮を尊重あそばすのに変わりはなかつたにもかかわらず、この宮をめぐる雰囂ふんいきとそれとに違つたもののあるのは不思議である。

明石あかしの女のもたらしたものはことごとく高華なものであつたところんなことを思う続きに薫は運命が自分を置いた所はすぐれた所であるに違いない、まして女二の宮とともに一品の宮までも妻に得

ていたならばどれほど輝かしい運命であつたであらうと思つたのは無理なことと言わねばならない。

宮の君はこの西の対の一所を自室に賜わつて住んでいた。若い女房たちが何人もいる気配けはいがそこにして皆月夜の庭の景色けしきを見ていた。そうであつたあの人も浮舟らと同じ桐壺きりつぼの帝みかどの御孫であつたと薫は思い出して、

「式部卿の宮様に私を愛していただいたものなのだから」

と独ひとりごと言を言いその座敷の前へ行つてみた。美しい姿の童女

が略服になつて、二、三人縁側へ出ていたが、薫を見て晴れがましいというように中へ隠れてしまった。これが普通の所の情景であると今見て来た廊の座敷と比べて薫は思った。南の隅すみの間のそ

ばで咳せき払いをすると、少し年のいったような女房が出て来た。

「人知れず好意を持っている者ですなどと申せば、それはだれも言うことだとお聞きになるでしょうし、またそうした若い人たちの口真似まねをすることも私にはできません。それよりも言葉でない実質的な御用に立つことではないかと捜しております」

と言うと、その女は女王にも取り次がず、賢がつて、

「思いがけぬお身の上におなりあそばしましたことにつきましても、宮様がどんなにいろいろなお望みを姫君の将来にかけておいでになりましたかと思われまして、悲しゅうございます。いつも御親切に仰せくださいまして、お宮仕えにおいでになりました御非難のお言葉なども、ごもつともだと女によおう王様は言っておいでに

なることとでございますよ」

こんなことを言う。並み並みの家の娘などのように聞こえることもはばかり言わず言う女であるといやな気のした薫は、

「もとから血族であるためというようなことでなしに、好意を持つ男として、何かの御用をお命じくだすったらうれいだろうと思います。うとうとしくお取り次ぎでお話などをしてくださるだけでは私も尽くしたいことがお尽くしできない」

と言った。そうであったというふう^{たかさご}に女房たちは思い、姫君を引き動かすばかりにしたはずであったから、

「松も昔の（たれをかも知る人にせん高砂たかさごの）と申すような孤立のたよりなさの思われます私を、血族の者とお認めくださいま

しておつしやつてくださいますあなたは頼もしい方に思われます」

取り次ぎの者に言うというふうにもなしに、こういう声は若

々しく愛嬌あいきようがあつて優しい味があつた。ただの女房としてで

あればよい感じに受け取れたであろうが、今の身になつては、すぐに人に逢つてこれだけの言葉もみずから発しなければならぬものと思ふようになったかと考えるとこの人を飽き足らぬものに薫は思われた。容貌ようぼうも必ず艶えんな人であろうと思ひ、見たい心も覺えたが、この人がまた宮のお心を乱す原因になることであろうと思われ、絶対の信用の持てない人は相手にしたくない気にもなつた。この人こそは最上の家庭に生まれ、大事がられて育つた、典型的な姫君というのに不足のない人で、他に幾いくたり人もない身の上

だったのであるが、自分として頼もしい女性と思われぬのはどうしたことであろう、僧のような父宮に育てられ、都を離れた山里で大人おとなになった人が姉女王にもせよ中の君にもせよ、皆完全な貴き女じよになっていたではないか、このはかない性情の人、軽々しい人と今の心からは軽侮の念で見られる人も、こうしたわずかな接触で覚えさせた感じは悪いものでなかった、と薫は八の宮の姫君たちのことばかりがなつかしまれるのであった。

宇治の姫君たちとはどれもこれも恨めしい結果に終わったのであったとつくづくと思ひ続けていた夕方に、はかない姿でかげろう蜻蛉とんぼの飛びちがうのを見て、

ありと見て手にはとられず見ればまた行くへもしらず消えし
かげろふ

「あはれともうしともいはじかげろふのあるかなきかに消ゆる世
なれば」と例のようにひとりごと独言を言っていた。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 下巻」角川文庫、角川書店

1972（昭和47）年2月25日改版初版発行

1995（平成7）年5月30日40版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年4月10日44版を使用しました。

入力：上田英代

校正：鈴木厚司

2004年8月20日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

蜻蛉

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>